

社会人1年生

源純夏 みなもとすみか

陸オカの力泳

中央大学水泳部女子の活躍はめざましかった。田中雅美が、中村真衣が、そして源純夏の力泳が日本中を沸かせた。あのシドニー五輪から2年、私たちは、この春法学部（法律学科）を卒業した源純夏さんに会いに、六本木に向かった。入社先のテレビ朝日の仕事の現場に。彼女が選んだのは、番組制作の道である。「陸の力泳」——源純夏、社会人1年生の近況レポートをお届けしたい。

（学生記者 柿元理榮・野倉早奈恵）

「お待たせしました！」

部屋に駆けこんできた彼女のナリが、一瞬私たちを当惑させた。水着姿こそ見慣れているけれど、ポロシャツにジーンズ。一つに縛った黒髪。肩に小さなポーチを掛けて元気よく現れた姿は、テレビでたまに見るAD（アシスタント・ディレクター）、そのものだった。

ただいまAD

「きのうは、家に帰ったのが午前4時で、会社に来たのが11時過ぎ。きょうも日付前に帰れるかなあ。そんな感じですよ、いつも。でもまだいいほうで、会社に泊まっている人もいて、局のソファやイスにごろんと寝ころがっている」

「スポーツ局スポーツセンター」に所属して、テレビ朝日系日曜深夜のスポーツ番組「Get Sports」のAD。それが彼女の現在のポジションだ。新聞記者のスタートが夜打ち朝駆けのサツ（警察）回りといわれるように、TVディレクターにとっては、「汗と涙のAD」が通

り道のようなだ。

「雑用ばかりですよ。アレ出してくれコレ出してくれ、というディレクターの指示に従って、いろんなテープを集めたり、資料を作ったり。教わらないとまだ何も出来ない自分がいて、いまは勉強、勉強ですね。楽しいですよ。何もかもが新鮮」

それをこなしつつ、8月末の独占放映「パンパシ（パン・パシフィック）水泳」では中継スタッフの1人として加わった。でも、画面には出なかった。

「あくまで、制作の側ですからね。マイクのこっち側について、選手の情報をストックに伝えたり、大会を知っている水泳選手の立場で、インタビューする選手をリラックスさせることができました……。とてもやり甲斐のある仕事でした。だから大会の成功がなによりうれしいですね」

スポーツ報道の番組づくりを通して、国民の水泳への関心を広めたい。オリンピックや諸大会を通して得てきた経験を番組をつくらせていくなかでどう生かしていくか。五輪メダリストゆえの強い思いである。

フラッシュ・バック

シドニー2000

——シドニーのシーンがよみがえる。

なかでも競泳女子最終種目、四百メートルメドレーリレーのクライマックスだ。

第1泳者・背泳ぎの銀メダリスト、中村（真衣）が5位と出遅れた。続く平泳ぎ・田中（雅美）も伸びない。



「いまはすべてが勉強」と明るく元気に語る源純夏さん

中間5位の折り返し。3番手バタフライの大西順子が頑張る。横一線からタッチの差ながら3位に押し上がり、すべてを源に託した。各国最強泳者による自由形ラスト100メートル。源が飛びこんだ。わずかに後退する。5位でターン。ドラマはそこからだった。

《往路で抜かれたドイツと南アフリカを……源が猛追する。残り10メートルでシツポをつかみ5メートルでついに並んだ。フォームもスト

ロークも関係ない……逆転だ。メダル奪取だ》（『日刊スポーツ』00年9月24日付）

「フィナーレは銅！ 日本新」という見出しが躍っている。タイム4分4秒16。4位とのタイム差じつに0秒17。

源は百メートル決勝（7位）に次いで、前日、五十メートル自由形で決勝進出という日本人初の快挙もやってのけた。午前、その決勝（8位）を戦つてのちの、まさに「劇泳」であった。

「最後の源さんで奇跡が起きました」と、スタンドに陣取つて声援を送つた中央大学の鈴木康司学長は感動をつづり、水泳部部长・松本道介文学部教授は「いぶし銀の輝き」「底光りする銅」とたたえた（『Hakumon』ちゅうおう 00年11月号）。

「純夏1号」から

「純夏2号」へ

振り返つて、どうですか？

「理想の、ベストの泳ぎができて満足できるレースでした。でも、あ

かといったら、関係ないですね。ア

レはアレ、イマはイマ。いい思い出です。宝物は箱にしまって、たまに開いてみるのがいいんです。おばあちゃんになつて、あのとときのメンバーと集まつて、『あのとときは人生で最高だったね』っていえればいいなあ、つて思う。お茶をすすりながら、ね。お互いに違う分野で、2、30年頑張つて生きたあとで。それまで、タイムカプセルに閉まつておきます」

大学まで夢中で水泳に取り組んだ「純夏1号」から、社会人としての「純夏2号」へ。そう表現した。世界の源純夏をみずから振り出しに戻して、という切り替えの見事さと、新たな意欲、ポジティブな姿勢。

理知的「泣かない純夏」

そういえば、松本教授は『文芸春秋』（00年11月号）の巻頭随筆でもレースに触れながら、「三人娘」の興味深い性格比較を披露している。

《三人は性格も身体つきもまったく違う。中村君はおおらかで好調なときは身体中からオーラを放つ感じ

だし、田中君は女らしくて感情もこまやかな努力家、そして源君はどうか理知的できりつとしてている。それぞれに第一人者としての風格もたえながら見事なトリオをかたちづくる《(〇秒一七の輝き)》

ナマイキだけれど、そこに

「泣かない源純夏」

という印象を重ねてみたい気がする。レース後抱き合って泣いたかもしれないけれど、他の3人とは泣き方が違って見えた。そういつたら、

「泣きましたよ、私も。持つてるDNAは女の子だもの」

笑いつつ、

「白黒はつきりつけるタイプだから、そう見えるのかも。うーん、確かに、男に憧れている部分ってありますね。男の人はカッコいいじゃないですか。カッコいいですよ。女の子じゃサマにならない……って思うことがしばしば」

ユング(精神分析学者)だったかしら。「アニメ」(男のなかの女性性)、「アニメス」(女のなかの男性性)という心理分析をふと思った。源さんの魅力はさながら「アニメス」がくりあげるカッコよさ。それゆえ、

異性よりむしろ同性に人気がある？

「そう、同性が多いんですよ。あと、オジサンとかオバサンとか、ハハ」

「源(テレビ朝)」初出場

水泳を止めたわけではない。6月、水泳・日本選手権で女子五十メートル自由形に「源(テレビ朝日)」として出場した。結果は3位だった。

「練習もできてなかったし、結果はいいんです。弱い源純夏は見たくない、という声もあるかも知れないけれど、ものを創る側について泳げるのは大変価値あることだと思っています。」

いまは勝つ負けるではなくて、仕事をやる人間というところにプライドをもちたい。テレビ朝日というチームにいる、チームのために頑張る。それで局内を含めて水泳の認知度が高まればいいと思うんです。上司からは、泳ぎたいなら泳いでいいよ、とおっしゃってらつて、すごく恵まれていると思いますね」

大会当日は、中大チームの後輩たちの輪のなかにいた、とうれしそう

に語った。「中大、イイよ！」と語尾も弾むのである。

「他のチームとは違う独特の空気をもっているし、応援も一丸となつて、中大イイじゃん」と、改めて感じましたよ。すごくうらやましいよ。大学の仲間と輪になつて何かができるってこと、それは学生のときだけの特権だから学生のうちにどんどんやってほしいな。それが未来につながっていくし、伝統にもつながっていくと思うから」

私たちがへのメッセージだろう。

家庭持ちつつ

仕事の「自己確立」

いま23歳。じつは結婚もしている。卒業前に入籍、いわゆる学生結婚だ。お相手は慶応大学水泳部出身の会社員。2歳年上、幼なじみだという。

「時間がサカサマだから、もう何日も寝顔しかみてない、みたいな。家庭と仕事の両立なんていまはできないですね。仕事がまだ半人前にもいかないんですから。仕事を覚えるためにはもっとキツくていいかな、とも思う」

と、やはり仕事の話に戻ってくる。バラバラに撮影して、はじめどうなるのかと現場で心配した映像が、ディレクターの手で、見事な番組映像に仕上げられていく。「手品のような」技術を、はやく身につけたい。そのためには過去のテープもたくさん見て、学ばなければ……課題はいろいろである。

「31人が同期入社なんです。みんなに早く名前を覚えてもらえて、ちよつとラクさせてもらったかもしれない。しかし、毎日が足踏み状態で、イメーজ通りにいかない。人前ではカッコよくありたい、と思うけどそれが出来ない。そのギャップとどうか」

そんな悩みも口にしました。「だから出来ることはなんでもやる。そんな気持ちです。時間をかけて自分を確立したい。いままでは選手として受け身でよかつたけれど、大きな会社では自分からアピールして、アプローチして発信する。言葉を発表していかないと駄目なんだ、と思っています」

「パンパシ水泳」での、小さな喜び。選手たちを「日本代表」と呼ぶ

ようにしようと、内部提案し採用されたのだそうだ。「サッカー・ワールドカップがあれば盛り上がったのは、『日本代表』だったから、でしょ。水泳もそうでなければおかしい、と思ってる」

仕事と水泳

テレビ朝日入社と聞いて、「反射的に浮かんだのは、長野冬季五輪・スキー女子モーグルで金、ことしのソルトトレイクでも銅メダルに輝いた〈フジテレビの里谷多采〉さんの先例だった。対抗的に〈テレビ朝日の源純夏〉へのまわりの期待も大きいだろう、というように。もちろん競技種目が違えば、選手年齢の違いもある。同列にはいかないけれど、「TVの仕事」と「泳ぐこと」。二つははどんなふうに関立するのだろうか。そんな質問をもう一度ぶつけてみた。

本人は『泳ぐこと』オンリーだったのが『純夏1号』、『TVの仕事』も『泳ぐこと』も頑張るのが『純夏2号』。変わらないのは、水泳というスポーツの魅力を伝えたいという

気持ち」と語る。育ての親である中大水泳部の高橋雄介コーチは「(源は)モノが違うんだから」と周囲に強調しているところでもある。高橋コーチに教わったことがある。こんな言葉だという。

「水泳のメダリストは何人もいない。目標になる人間になれ。上に立つのであれば、行動も言動もそれにふさわしくなければならぬ」いつも胸にしまって、自分を支えている大事な言葉、と聞こえた。

頼もしき「お姉さん」

私たちはテレビ局内を案内してもらった。「ニュースステーション」のセット・スタジオ、放送時プロデューサーやディレクターが居並ぶ調整室、エレベータで上って、スポーツ局の職場。「びつくりしたでしょう。汚くて……」

後ろを従って歩きながら、目がいく。肩幅の広さ、筋肉の盛り上がり。水泳が鍛えあげた見事な体型に。やはり「モノが違う」のである。しかも謙虚でしなやかで……私たちは、ほんとに頼もしい「お姉さん」に出会った気分なのである。

「テレビ朝日の源純夏」

「純夏2号」の、これからの方向に答えを出すのは、賢明な源さん本人にちがいない。

3人娘、とっておきの話

そうそう、他のふたりの近況も。一年先輩の田中雅美さんはアメリカに渡り、同期卒業の中村真衣さんは地元の新潟・長岡に帰って、ともに現役スイマーとして練習に励んでいる。中村さんのプロ活動をめぐる動静も、新聞は伝えている。

ふたりとは連絡がありますか？
「雅美ちゃんアメリカなので連絡とってないけど、真衣がね」と、こんな話。

笑いながら——「サッカーの稲本選手の大ファンなのよ。稲本選手が『ニュースステーション』に出演したとき、サインをもらってー、とせがまれて。私、ワールドカップの担当じゃなかったんですが、サッカー担当の方に頼んで、ようやくもらいましたよ、稲本さんのサインを。真衣、すごく喜んでた。『中村真衣さんへ』とは書いてなかったけれど」



調整室で——番組の采配ふるう日を目指して